

2023 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	日本の海外住居地における「日式住宅」の住宅計画と建築意匠に関する調査研究
キーワード	①海外住居地、②台湾日式住宅、③建築意匠

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	クオ ヤウエン 郭 雅雯
配付時の所属先・職位等 (令和5年4月1日現在)	京都光華女子大学短期大学部 専任講師
現在の所属先・職位等	京都光華女子大学短期大学部 専任講師
プロフィール	採択者は生まれも育ちも台湾であり、日本の大学に進学するまでは台湾で生活していた。日本の歴史ある伝統的な建築に惹かれ、留学生として京都大学に入学し、日本統治時代に日本人が台湾で建設した「日式住宅」、台湾に生まれた「湾生」である日本人が生活していた日式住宅地を研究対象として取り上げ、論文を執筆し博士（工学）学位を取得した。日本学術振興会の研究員の経験を積んだ後、台湾の大学に就職し、建築学科とインテリアデザイン学科の助教授として勤めた。その後、京都光華女子大学に着任し、現在はライフデザイン学科の住居、インテリアデザイン分野の科目を担当しており、植民地建築の保全活動、伝統産業との関わりのあるものづくりの教育や地域連携のまちづくりにも取り組んでいる。 

1. 研究の概要

本研究は、日本植民地であった台湾を事例として、当時の日本人による海外居住の実相を明確にすることを目指している。そのために、本年度は、日本人により台湾で建設された「日式住宅」の住宅計画の実態を解明し、その室内外観の建築的意匠の特徴を把握することを目的としている。当時の住宅実例が掲載されている日本植民政府が作成した史料・資料文献調査を進め、これらに掲載されている住宅実例を研究対象として取り上げ、採択者の現在までに明らかにした持家や官舎の知見に基づき、台湾日式住宅の特質を包括的に捉え、分析を行う。具体的には、(1)史料・資料文献及びその中の図面、写真、居住状況の記録などの収集を行う。(2)日式住宅の住宅計画の実態、建築的な特徴、室内外観の意匠などを分析する。

2. 研究の動機、目的

台湾は1895年（明治28年）に清朝から割譲され日本領となり、1945年までの51年間（以下、日本統治時代）、日本の植民地として歩んだ。日本植民政府である台湾総督府の指導により、台湾が発展を続ける中、政府関係者や軍人だけでなく、多くの一般の日本人も台湾に渡った。日本統治時代には日本人移住者のための住宅（以下、日式住宅）が台湾全土で数多く建設された。戦後、日本の敗戦により、台湾総督府による台湾統治が終焉を迎え、日式住宅の居住者であった日本人は次第に引き揚げた。以降、日式住宅の多くが中華民国政府に接收され、公的機関の宿舎として台湾漢人によって住み継がれることとなった。しかし、現在、行政院は国有資産の有効利用の観点から、台湾全土の日式住宅を解体・撤去する政策を行っているため、

現存している日式住宅は消滅する危機に直面している。そのため、台湾日式住宅への調査研究を行う緊急性が非常に高い。

日本人による海外住居の実相を明確にするために、本年度では、日本統治時代に日本植民政府である台湾総督府が作成した史料・資料文献に掲載されている住宅実例を取り上げ、その住宅計画の実態や建築的な特徴、室内外観の意匠を把握することを目的としている。

3. 研究の結果

本年度は上述で呈示した研究目的にそって、以下の研究調査を行った。

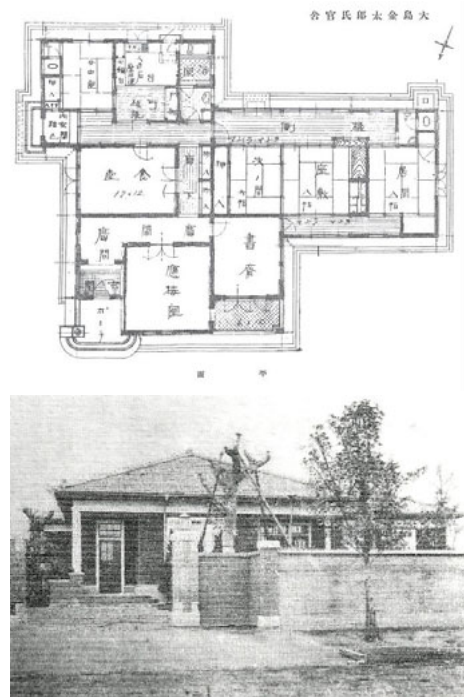
(1) 現地での史料・資料収集調査の実施

当時の日本植民政府である台湾総督府が作成した史料・資料文献が残されている。台湾に渡り、その史料・資料文献の収集調査を行った。史料・資料に掲載されている日式住宅実例を調べ出し、その図面、写真、居住状況の記録などの複写を行った。

(2) 図面や写真、記録による住宅実例の分析

史料・資料文献に掲載されている明確に判断できる日式住宅実例の図面、写真、記録などを分析対象として取り上げ、その住宅計画の実態や建築的な特徴、室内外観の意匠などを把握し、分析を行った。

史料・資料文献に掲載されている台湾の日式住宅は主に中廊下型の住宅形式である。平面計画は東西に長い矩形にまとめ、その中部に中廊下が東西に貫通する。中廊下の片側に玄関ホールに接する洋室（応接室）1室があり、片側に連続した和室（床の間、違い棚、書院が設けられている座敷、次の間、居間など）が並ぶ。規模の大きい住宅は、応接室の他、書斎や食堂も洋室の作りでの和洋折衷型が多く見られた。中廊下により女中部屋、台所、浴室、内玄関などの空間が分離されたことが見られたが、必ずしも居室や縁側が南面に、水回り等のサービス空間が北面に配置することではないことが分かった。また、竹小舞土壁の作り方で、外壁の仕上げに下見板張りになり、台湾の気候風土に適応するため、居室に出窓が設けられ、通気口の設置、基礎を高くするなどが多く見られた。



大島氏住宅（1930年建設）上：平面図 下：正面写真

4. 研究者としてのこれからの展望

台湾各地で建設されたこれらの日式住宅についてそれぞれ一定の研究成果をあげている。しかし、日本人が海外で建設した日式住宅は台湾だけではない。本研究は、この研究が台湾を扱った以後に、さらに台湾以外のアジア文化圏で日本人により建設された日式住宅の全体像を明確にしたい。採択者はこれまでの研究成果を踏まえ、さらに今後、台湾以外の日式住宅、日式住宅地も含め、統一的な視点から日本人による海外居住の実相を明確にすることを目指し、その成果は大いに期待できると考えられる。本研究はその第一段階としての挑戦的役割を担い、今後の研究継続の発展の可能性と方向を図るものとなると考えている。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

本年度は台湾に渡り、当時の日本植民政府が作成した日本統治時代の膨大な史料の中から重要と思われる史料・資料を選択し、当時の史料・資料収集調査を行いました。しかし、当時の史料・資料は膨大な数があり、収集や整理に非常に時間がかかり容易ではありません。また、この研究を遂行するために海外に渡る経費がかかりました。今後は、植民地状況という文脈をおさえつつ、アジア文化圏への研究視野をさらに広げていく価値を有する研究であるため、さらに膨大な研究費用が必要になると考えられます。本年度は、本奨励金により海外に渡る経費を気にせず、研究を遂行できたこと、日本人による海外居住の実相を解明するための研究を一步前進できたことにご助力をいただき、非常に感謝しております。